理科教師日記

コスタリカの旅
―ケツァール鳥を見に―

せきね みきお（自然史研究家、日本蜘蛛学会会員）

『ケツァル鳥の館』を読んで

グアテマラのジャングルに繰り広げられる動物たちの誕生と成長、繁殖と死という生の営みをファンタジーの世界として描いたグアテマラの作家ビルヒリオ・ロドリゲス・マカル（Virgilio Rodriguez Macal）の著した物語『ケツァル鳥の館』（児嶋桂子訳、山本容子画　2001年、文藝春秋）を読んで、私は深く感動した。

群れから離れて生きる運命を背負ったハナグマのイツル。彼は、1000頭に1頭の割合で産まれてくる特別なハナグマ。「アンダ・ソロ」と呼ばれ、皆から畏敬され野性の生を謳歌するイツルは、この物語の語り部である老猟師ペドロ・クラーンの銃により、その生を終える。なんとも残酷な結末である。「自然の掟」である生と死を、著者が“緑の館”と表現するマヤのジャングルの光景の中に美しく描いた物語である。ビルヒリオ・ロドリゲス・マカルの作品は、グアテマラの小学校で国語の教材として読まれ、広く人々に親しまれているとのこと。

さて、表題作の「ケツァール」は、グアテマラの国鳥。この鳥は、切手だけではなく、グアテマラの国旗にも図案化されているし、この国では通貨の単位も“ケツァール”である。ケツァールは、人を避け海抜数千メートルの中央アメリカ高地の森林に棲む。自由の精神の象徴であるケツァールは、捕獲されると自由を奪われたことで悲嘆にくれて死んでしまうと現地では言い伝えられているとのことだ。世界でもっとも美しい鳥といわれるが、この“自由の精神”は迫害され、稀な鳥になってしまった。

「マヤのジャングルは、私たちに世界の見方を教えてくれる多くの物語を秘めています。」とこの本の帯にあった。私もそう思う。

コスタリカの旅

世界でもっとも美しい幻の鳥ケツァールは、手塚治虫の『火の鳥』のモデルともいわれている。ケツァールを是非この目で見たい…、とコスタリカへの私の旅が始まった。*1

グアテマラのマヤのジャングルでは今や稀な鳥だが、コスタリカでならこの鳥を見ることができるという。日本の九州と四国を合わせたほどの小さな面積のコスタリカは、しかし世界の全生物の5％以上が棲み、国土の25％を生物保護区や国立公園として指定し、国民1人当たりの生物保護区面積は世界1位の国なの

である。

さて、アメリカのアトランタで乗り継ぎ、コスタリカの首都サン・ホセに着いたのは大阪を発ってからおよそ24時間後であった。帰途は、アトランタに1泊しなければならないから、コスタリカは往復に3日間を費やさねば訪れることのできない遠い国である。

2006年12月末、今日はこの地で自転車ロードレースが開催されるとのこと。交通規制の前にサベグレ（Savegre）に到着をしたいと朝早くからのサン・ホセ出発となった。サベグレ、そこはケツァールが棲むセロ・デ・ラ・ムルデ（Cerro de la Muerte：hill of the death）の熱帯雲霧林が拡がるコスタリカの中央高地だ。パナマへ向かうパンアメリカン・ハイウエイと途中でさよならをして、私たちを乗せた車は渓谷を下っていく。ラン、地衣類、アナナス類などを着生させた樹は、まさに小宇宙を形作っているといっても過言ではない。樹々の間を抜け、サベグレマウンテンホテルに到着。レストランの前庭に設置されている砂糖水を入れたバード・フィーダーの周りを飛び交うハチドリの種類とその数の多さに驚かされる（写真1）。早速、ホテルの周辺と自然観察路を歩く。ドングリキツツキ（Acorn Woodpecker）、現地の言葉でゾピロテ（Zopilote）と呼ばれるコンドル、フライキャッチャー（Flycatcher）…など、鳥の種類も数も多い。明日は、ケツァールに逢えるだろうか？

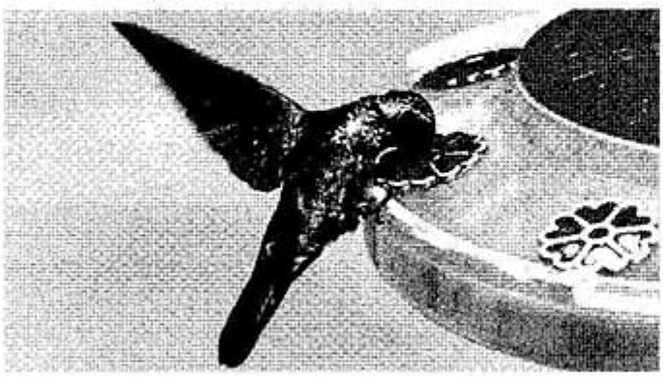

写真1　ミドリハチドリ
学名：*Colibri thalassinus cabanidis*
北アメリカでハチドリは23種が知られるが、コスタリカには52種ものハチドリがいるとのことである。耳の辺りが菫色のハチドリで高地によく見られる種である。

ケツァール鳥に出逢う

翌朝、天候にも恵まれケツァールとの出逢いの期待に胸が高鳴る。私の嫁さんは、現地ガイドさんのフィールドスコープの接眼部にコンパクト・デジカメを押しあてデジスコ写真を撮る。私は、EOS kiss デジタル一眼レフ＋EF400㎜ f5.6望遠レンズで狙う。コスタリカの野鳥をガイドさんに紹介してもらいながら2時間ほど歩いただろうか。いた！　リトル・アボカド（野生のアボカド）の樹の梢にケツァール。こいつは、雄だ！　長い羽がエメラルドグリーンに輝いている。緑色の羽毛は陽のあたり加減でコバルトブルーに輝いて見える時もある、ちょうどそれはモルフォ蝶の翅の色のように「構造色」で輝くのである。そして、イチゴ色をした胸。まるでぬいぐるみのように可愛らしい顔の表情まで見ることができた。そして！雌もやって来た！（写真2、写真3）

手の届きそうなすぐ近くでケツァールを見ることができてとってもグラシアス（Gracias）！　ケツァールは、リトル・

←写真２　雄のケツァール
学名：*Pharomachrus mocinno*
体長 36cm ＋ 羽 64cm で 1 m ほどになる。羽の色は、陽の光を受けるとエメラルドグリーンからコバルトブルーに変化し、とても華麗だ。

写真３　雌のケツァール→
雌の羽は長くなく、胸も赤くない。現地のガイドさんによれば、つがいのケツァールが見られるのは珍しいとのこと。

アボカドの実を丸呑みして果肉を消化させると口からこの種子を吐き出す。こうして初めてこの種子は発芽できるのである。ケツァールとその生を支える植物との見事な共存・共生の関係がそこにあるのだ（写真４）。

コスタリカは、憲法により軍隊を放棄した世界で初めての国である。軍事費に予算をまわす代わりに国民の医療や教育に使うことで、中米の他のどの国よりもコスタリカは福祉が行き届き豊かで治安が良い。現地のエコツアーのガイドさんは、皆このことに誇りをもって熱っぽく語ってくれた。軍隊を放棄することで平和を守り、そのことで 60 カ所以上もの国立公園と自然保護区を持ち、豊かな自然を観光資源として大切にしようとしているコスタリカにグラシアス!!　地球の裏側のこの地で、念願のケツァールと出逢えたことは、言葉では言い表すことのできない感激であった。

写真４ リトル・アボカド（アボカドの野生種）
学名：*Persea americana*
ケツァールは、緑色の実（上）を口に含んで果肉を消化させた後、茶色の種子（下）を吐き捨てる。

トルトゥゲーロ国立公園

カリブ海側に位置するトルトゥゲーロ国立公園（Tortuguero National Park）は、ウミガメ産卵の地で有名であるが、今はそのシーズンではないので、熱帯雨林の運河をボートで巡り野生生物を観察するツアーに参加した。12 月～４月は乾季のベストシーズンだが、それでも時折スコールにみまわれる。マワンバロッジでの夕食後、ヘッドランプを照らしながら私はクモを探すべく川沿いの自然観察路を歩いたが、大きな水音に足がすくんだ。どうやら、カイマン（ワニ）が近くにいたようだ。私は、早々にロッジに引き返し、ほっと胸を撫で下ろした。

鈴の音のような鳴き声が樹々の上のほうから聞こえてくる。これは、コヤス

写真５　アカメアマガエル
学名：*Agalychnis callidryas*
樹上性のカエルで、葉に産卵をする。

ガエル（Fitzinger's Leaf Litter Frog）だと教えてもらった。ここでは、有名なアカメアマガエル（Red-eyed Tree Frog）を撮ることもできたし、翌日の運河巡りでは、熱帯雨林の多様な生きものたちと出逢えることだろう（写真５）。

コスタリカで見たクモ

私は、トルトゥゲーロ国立公園とブラウリオ・カリージョ国立公園（Braulio Carrillo National Park）でクモの写真を撮影した。コスタリカを訪れる前に、"Wasp Invades a Spider and Puts It to Work" というニューヨーク・タイムズの記事をネットで手に入れていたのだが、これはウィリアム・エバーハード（William G. Eberhard）の仕事を紹介する記事である。彼の 2001,The Journal of Arachnology 29;354-366 によれば、ハチに寄生され、ハチの幼虫が分泌する化学物質によってこの寄生バチの蛹用の特別な網を張らされた後に死んでしまうという気の毒な（？）アシナガグモの仲間 *Plesiometa argyra* がコスタリカの熱帯雨林にいるのである。さらに、ヒメグモ科から独立して Sinotaxidae 科に分類されるようになったクモで階段網という珍しい網を張るクモもこの地にいることが知られている。もちろん私は、クモの網に絡みとられた虫のように、クモの魅力から逃れることのできぬ男だから、コスタリカでもこれらのクモを探したが出逢うことはできなかった。そのかわりに *Nephila clavipes* という日本のオオジョロウグモに似たクモやトゲグモ類などを撮影してきたというわけである（写真６）。

クモの収穫は少なかったが、念願のケツァールとの出逢いという無上の喜びを体験できたことがとっても嬉しかった。ケツァールの棲む森を保護している国コスタリカは、野生の生物にとってもそこに住む人々にとっても夢のような平和な国であった。ケツァールとアボカドの野生種が共生をしているように、野生生物と人類が共存できたなら、なんて素敵なことだろう。

〈参考文献〉

*1 せきね みきお「コスタリカの旅」(2007年)
http://www.cyberoz.net/city/sekine/COSTA01.htm

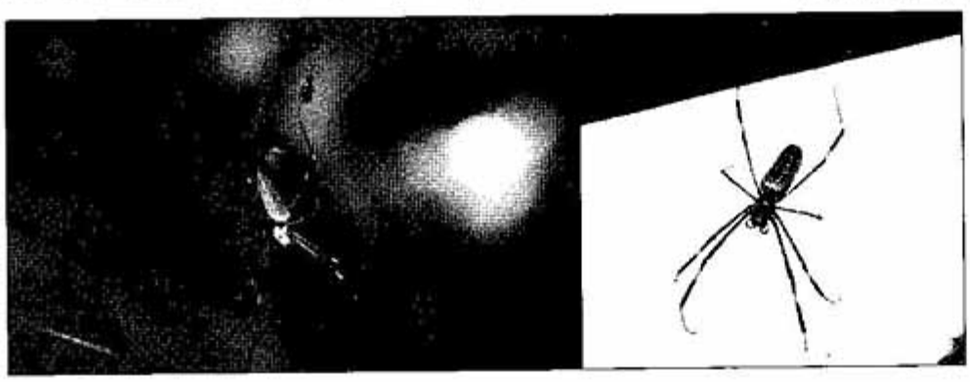

写真６　ジョロウグモの一種
学名：*Nephila clavipes*
日本のオオジョロウグモに似たクモ。